

戦後50周年ドラマスペシャル

傷跡のいえた日

作 : 岡崎道成

演出 : 小川政弘

植村勇(ナレーターも)

学生時代の勇

妻寛子

ロジャー・スミス

マイケル

ヘンリー牧師

女性教会員

男性教会員

<前編>

—セミの声—

妻

あなた、麦茶いかが？

植村

ああ、頂くよ。

妻

あら、またこんなに雑誌買ってきて。ほんとにこれ全部読むんですか？

植村

ははは、何しろ戦後50周年だからな。特集記事があると、つい手が出てしまうんだ。

ナレーション

読みかけの雑誌に再び目をやりながら、わたしは妻に答えた。わたしは植村勇。大学で物理学の教べんをとっている。1945年に日本が太平洋戦争に敗れてから、今年でちょうど50年。そのせいか雑誌だけでなく、新聞やテレビも、連日こうした特集でにぎわっていた。

妻

そう言えば、ロジャーさんお元気かしら。

植村

ああ、あの人ももうだいぶ年だからなあ。

妻

またお会いしたいですねえ。

植村

そうだね。

ナレーション

ロジャー・スミス。戦後生まれのわたしが人並み以上に戦争に関心があるの

も、もとはと言えば彼がいたからだ。わたしと太平洋戦争をつなぐ人物、それがロジャー・スミスだった。

ナレーション 今からちょうど20年前の1975年秋、わたしは修士号をとるため、アメリカ・テキサス州の大学院に留学した。クリスチャンだったわたしは、渡米するとすぐに教会を探した。そして最初の日曜日、その町にあった教会の礼拝へと足を運んだ。礼拝の後、わたしはさっそく隣に座っていた婦人に話しかけた。

勇 How do you do? わたしはイサム・ウエムラといいます。
婦人 ようこそ、ミスター・ウエムラ。この教会に新しい方が来るのは久しぶりですよ。どちらからいらっしゃいましたか？
勇 はい、日本から来ました。
婦人 Oh, …日本…。
勇 …何か？
婦人 い、いいえ…。あの、どうぞごゆっくり。

ナレーション 婦人はそう言うと、そそくさと席を立ってしまった。その人だけでなく、教会の人たちの反応は、どこかおかしいものだった。わたしが日本人だと言ったとたん、急に当惑したようにそわそわし始めるのだ。父、母ともにクリスチャンの家庭に育ったわたしにとって、教会という所は居心地のいい、安心できる場所だった。たとえ国が違って、同じ信仰を持つ人たちのいる教会に行くことに何の不安もなかったし、田舎町には珍しい日本人ということで、歓迎してもらえるという期待感もあった。でも何なのだろう、この人たちの態度は。わたしはその日、キツネにつままれたような気持ちで教会を後にした。それでもわたしは、次の日曜日にもその教会へ行った。町にはほかに教会がなかったのも、そこへ行くしかなかったのだ。

勇 Good mor ナレーション i ナレーション g..

ナレーション そう言って、大柄な中年男性の隣に座ろうとしたわたしの肩を、だれかがたたいた。

教会員 ミスター・ウエムラ、ちょっと。
勇 え、わたしですか？
教会員 いいから、ちょっと。

勇 ……はい。

ナレーション 礼拝堂の後ろに呼ばれたわたしに、その人は小声で話しかけた。

教会員 ミスター・ウエムラ。あの人の近くには座らない方がいい。あの人に話しかけてもいけない。いいですね。

勇 あのうって、あの、大柄な男の人ですか？

教会員 そうです。

勇 なぜですか？

教会員 ……わたしからは言えません。でも、あなたは日本人だから…。とにかく、今はそうしてください。

ナレーション わたしは訳が分からずも、その言葉に従ってその人から少し離れた席に座った。後で気が付いたのだが、その人は、わたしとすれ違って決して目を合わせようとはしなかった。教会のほかの人たちも、あまりわたしに話しかけてこなかったが、次第にそれも、彼を気にしているためだと分かってきた。その男が、ロジャー・スミスだった。

勇 (モノ)彼は、何者なんだ？ なぜわたしを避けるんだ？「あなたは日本人だから」とは、どういう意味だろう。

ナレーション こうして、何となく居心地の悪い日々が続いた。それから何か月かたったある日曜日の礼拝の後、わたしは教会のヘンリー牧師に呼び止められた。

ヘンリー イサム、話がある。わたしのオフィスへ来てくれないか。

勇 え？ ……はい。

ヘンリー 実は、ロジャーのことなんだが…。わたしもこのままではよくないと思っている。君やロジャーにとってはもちろん、教会にとってもね。

勇 まあ、どこにでも気むずかしい人はいると思うんですけど…。

ヘンリー いや、そういう簡単な話ではないんだ。実は…。

ナレーション そうしてヘンリー牧師は、ロジャーの身の上について話し始めた。

ナレーション 1942年、昭和17年4月18日、真珠湾攻撃以来勢いづいた日本に打撃を与えるため、アメリカは、急ごしらえの空母ホーネットからB25爆撃機16機を日本へ飛ばした。世に言うドウリトル攻撃隊である。太平洋の島々が日

本軍の支配下にあった中で、彼らはやすやすと東京その他の都市の爆撃に成功、日本軍部に大きな衝撃を与えた。ロジャー・スミスは、このドウリットル攻撃隊の一員だった。攻撃隊のうち何機かはそのまま中国奥地へと飛び去ったが、日本軍占領下の地域に不時着して捕虜となった者もいた。そして、厳しい拷問によって作戦の内容を問われた後、3名が銃殺された。だが、ロジャーたち5名は、拘置所送りとなって生き延びたのだった。

ヘンリー ロジャーは、日本の拘置所で大変な仕打ちを受けたんだ。戦争が終わって彼が帰国した時、迎えただれもが我が目を疑った。丈夫で体格の良かったロジャーが、見る影もなくやつれ、体重も半分の30キロ台に減っていた。タバコを口にした刺激で倒れてしまったほどだった。ロジャーは日本を、そして日本人を決して赦^{ゆる}せなくなっていた。その時から今日まで、彼は日本でのことを詳しく語ろうとはしない。だが彼の気持ちは、教会の人ならだれでも知っている。イサム、もちろん君が悪いわけじゃない。でも、たまたま君という日本人が、彼の前に現れた。戦争の傷跡は、こんな田舎町にもまだ残っているんだよ。

ナレーション わたしはヘンリー牧師の言葉を、困惑しながら聞いていた。ロジャーの体験の話は確かにショックだった。太平洋戦争。それはわたしにとって、それまで歴史の本の中の出来事に過ぎなかった。それがいきなり生活の中に、何の前触れもなく入ってきたのだ。しかし、それに対して自分がどうすればいいのかは分からなかった。日本人として彼を気の毒だとは思ったが、かと言って、彼を虐待した日本軍に代わって自分が謝るべきだとは、どうしても思えなかったのだ。わたしはその夜、教会でただ一人打ち解けることができたマイケルに愚痴をこぼした。

勇 マイケル、僕はロジャーさんのことをどう考えたらいいか、よく分からない。ロジャーさんが僕を避けるのも無理はないと思うけど、僕は日本軍じゃない。戦争なんて、全然知らない世代なんだ。どうして日本人っていうだけで、こんな気まずい思いをしなくちゃならないんだ？

マイケル 僕も何て言ったらいいか分からないよ、イサム。ただ、僕にはロジャーを責めることはできない。彼だってつらいと思うんだ。神様がどう解決してくださるか、祈って待つしかないんじゃないかな。

勇 でも、聖書には「汝の敵を愛せ」と書いてある。ロジャーさんだって、クリスチャンなら知らないはずがないよ。

ナレーション それが正直な気持ちだった。幼いころから教会になじんできたわたしにとっては、クリスチャンの間でこんな気持ちを味わうことに、どうしても納得がいかなかったのだ。

ナレーション そんなある日のこと、わたしは何気なく手にした雑誌の、一枚の写真に目を奪われた。

勇 これは…？

<後編>

ナレーション わたしは植村勇。今から20年前、アメリカに留学中だったわたしは、ある田舎町の教会に出席していた。その教会には、日本人を赦せないという元軍人のロジャー・スミスがいた。ある日のこと、わたしは何気なく手にした雑誌の、一枚の写真に目を奪われた。

勇 (モノ)これは…？

ナレーション 一人のアメリカ人パイロットが、目隠しをされ、日本の軍人に両側から押さえられていた。写真の見出しには「ロジャー・スミス中尉、捕虜となり護送される」とある。わたしは心臓が止まりそうになった。

勇 (モノ)これがあのロジャーなのか…。

ナレーション 大柄な体格は今と変わらないが、目隠しをされ、両腕をつかまれているその姿は、まるで犯罪者だった。彼はこの後、日本の拘置所で虐待を受け、ぼろぼろになって帰国したのだ。

ヘンリー(回想) ロジャーは日本を、そして日本人を決して赦せなくなっていた。イサム、もちろん君が悪いわけじゃない。でも、たまたま君という日本人が、彼の前に現れた。戦争の傷跡は、こんな田舎町にもまだ残っているんだよ。

ナレーション その時、それまで人ごとのように思っていたロジャーの苦しみが、じわじわとわたしに迫ってきた。と同時に、「目を合わせてくれない、話しかけてくれない」というわたしのつぶやきなど、ささいなことに思えてきたのだった。

ナレーション アメリカに来て3年が過ぎた。わたしは大学で研究を続けることにしていたので、かねて婚約中だった女性を日本から呼び寄せ、結婚式を挙げることになった。教会の人たちも、意外にも快く準備を手伝ってくれた。

マイケル イサム、タキシードは僕のをを使うといい。背丈も同じくらいだし。花嫁のブーケはサンディーが作ってくれるし、パーティーのケーキはミセス・ピーチに頼んでおいたよ。

勇 ありがとう、マイケル。みんなにも、ほんとお世話になってしまって…

マイケル 水臭いな。新しいクリスチャンホームが生まれるんだ。みんな喜んでよ。

勇 …僕が日本人でも？

マイケル …ロジャーのことか。彼のことは、君が気にする必要はないよ。確かに、ロジャーにとってはつらい体験だったろうけど、それとこれとは別だからね。

勇 そうかな…。

マイケル それより、君のフィアンセはいつこっちへ来るんだ？ 君たちの家族も来るんだろ？

勇 いや、彼女だけだ。

マイケル 両親は来ないのか？ じゃあ、だれが父親役をやるんだ？

勇 ああ、それはまだ考えてないんだ。

ナレーション 結婚式では、父親が花嫁の手を取ってバージンロードを進んでいくのが普通だった。だが、その時のわたしには、日本から家族を呼び寄せる経済的な余裕はなかった。

マイケル そうか。ま、何とかなるさ。花嫁さえいればね。

ナレーション ロジャー・スミスがわたしのもとに突然やってきたのは、結婚式の数日前のことだった。

ロジャー ミスター・ウエムラ。あなたのフィアンセの両親は来ないと聞いたのだが。

勇 え？ ええ。

ロジャー では、だれが花嫁の手を取って歩くんですか？

勇 …だれもいません。父親役はなしでやろうと思ってます。

ロジャー …もし君さえよければ、わたしがその役をさせてもらえないだろうか。

勇 え…？

ナレーション わたしは、耳を疑った。ロジャーがわたしを訪ねてきただけでも十分驚きな

のに、その上彼は、わたしの結婚式で花嫁の父親役をしたいと言う。わたしは動揺した。

ロジャー
勇
勇

どうだろう。ぜひ、わたしにさせてもらえないだろうか。
は、はあ…
(モノ) どういうつもりなのだろう。

ナレーション

あの写真を見て以来、わたしはロジャーがどんなに日本人を憎んでいるか、十分ではないながらも理解しているつもりだった。それだけに、彼の申し出を素直に受けていいものかどうか、彼の真意をはかりかねていた。

マイケル
勇
マイケル
勇
マイケル
勇
マイケル
勇
マイケル
勇

ええっ、ロジャーが、父親役を？ まさか。
本当なんだ。昨日僕のところに来てそう言った。
でも、彼の日本人に対する気持ちは、この教会の人ならみんな知ってる。信じられないよ。
僕も信じられなかったけど、断る理由もないし、結局お願いすることにしたよ。
…大丈夫かな。
何が？
いや、考えすぎかも知れないけど、結婚式で何か、その、変なことを…。
いやあ、まさか。

ナレーション

そうは言ったものの、ロジャーが何を考えているのか分からなかったのは事実だった。落ち着かない気持ちのまま、結婚式の日がやって来た。

ナレーション

よく晴れた土曜日だった。が、列席している教会の人たちの表情は、心なしか硬かった。ロジャーが父親役をすると聞き、やはり一抹の不安を感じているのだろう。わたしは、無事に式が済むことを祈りながら、一番前の列で花嫁の入場を待っていた。

ヘンリー

これより、イサム・ウエムラとヒロコ・タカヤマの結婚式を行います。花嫁入場。

ナレーション

ウェディングドレス姿の花嫁と、彼女の手を取ったロジャーが、ゆっくりとバージンロードを進んできた。その時だった。

勇 ロジャーさん…。

ナレーション わたしは、彼の顔を見てはっとした。ロジャーは、大粒の涙を流して泣いていたのだ。それを見た教会の人たちも泣いていた。わたしの頭の中で、あの雑誌の目隠しをされた犯罪者のような写真の彼と、今あふれる涙をぬぐいもせずに花嫁の手を取って歩く彼とが重なった。

ナレーション 今、この2人は神様と皆さんの前で誓約を交わし、夫婦となりました。夫婦にとって大切なのは何でしょうか。それは、愛し合うこと、そして赦し合うことです。当たり前なことだと思われるでしょう。教会でも、講壇からこれが語られない日はありません。しかし考えてみると、わたしたちはしばしば相手を受けない、赦せない自分を見いだします。皆さん、愛するという事は、簡単なことではありません。クリスチャンだからといって、簡単に人を愛せるものではありません。むしろクリスチャンだからこそ、愛することのできない自分、人を赦せない自分を見だし、苦しむのです。そして、自分の無力さ、罪深さに思い悩みます。しかしわたしたちは、そこで絶望するものではありません。こんな自分を愛し、こんな自分を赦すために十字架で血を流された、主イエス・キリストを思い出すのです。「わたしにはできません、しかしあなたならできます。主よ、助けてください。」。そう告白するとき、この神様の大きな哀れみの愛が、わたしたちを覆ってくださるのです。今、この人を生涯愛すべき相手として神様が備えてくださったことをしっかりと心に留め、本当に祝福された家庭を築いていただきたいと思います。さて、聖書の中には、夫婦について書いてある箇所が…(FO)

ナレーション あのロジャーの涙を見た瞬間、わたしは「ああ、そうだったのか」と思った。いや、わたしだけではない。そこにいただれもが感じたのだ。「ロジャーにとって、やっとこれで戦争が終わったのだ」と。若いころからクリスチャンだった彼にとって、愛と憎しみのはざままで生きてきた年月は、何と長かったことだろう。とりわけ、わたしの妻の手を取るまでに彼はどれほど悩み、苦しんだことだろう。わたしが目の前に現れた日以来、彼は絶えず「なんじの敵を愛せ」という神様の声と葛藤^{かっとう}していたに違いない。自分をあれほどひどい目に遭わせた日本人の一人であるわたしを、赦そうと思っても赦せない、愛そうと思ってもどうしても愛せない。神様は、この葛藤の果てに彼がそんな自分の弱さを素直に認めたときに、父親役になる決心をさせてくださったのだろう。彼の涙は、その葛藤の実なのだ。そしてその時、わたしとロジャーの間に初めて平和が生まれたのだ。神様が、あのイエス・キリストの十字架の下での

みつくり出してくださる平和が。

ナレーション 平和。口で言うのは簡単だし、表向きの平和を作ることは、たやすいかもしれない。しかし、本当の心の平和は、それをつくり出すことができない自分、罪ある自分を神様の前に認めることから始まるのだ。

ナレーション 戦後50年の今年、今なお戦争の傷跡に苦しんでいる人が、世界中にどれだけいるだろう。そして、その傷が本当にいやされるまで、あとどのくらいかかるのだろう。窓から8月の空を見上げながら、わたしはそんなことを考えていた。

—セミの声、遠くにかすんで—

<完>
